

放射線の健康影響に係る研究調査事業 令和4年度研究報告書

研究課題名	福島県内における東日本大震災前後の停留精巣患者数の実態調査
令和4年度研究期間	令和4年4月1日～令和5年2月28日
研究期間	令和4年度 ～ 令和6年度（1年目）

	氏名	所属機関・職名
主任研究者	小島祥敬	福島県立医科大学医学部泌尿器科学講座・教授
分担研究者		
若手研究者		

キーワード	停留精巣、福島第一原発事故、手術件数、東日本大震災、福島県
-------	-------------------------------

本年度研究成果
<p>I 研究背景</p> <p>東京都民の約40%が、「福島第一原発事故（以下原発事故）に伴う放射線被ばくで、次世代以降の人への健康影響が福島県民に起こる可能性が高い」と考えている。また、2018年には、「原発事故以降、日本全国で幼児の停留精巣の手術（Orchiopexy）件数が増加したことから停留精巣（Cryptorchidism）患者の出生数が増加しており、その原因として原発事故による拡散された放射性物質が考えられる」という報告がなされた¹⁾。この論文を含め、原発事故による健康影響に関する論文は決して少なくなく、これらの論文が、福島県に対する風評を助長していると言っても過言ではない。</p> <p>原発事故と健康影響との因果関係を示すには、県内における疾患の発症数に関する実態調査が必要になる。2018年に報告された上記先行論文では、研究デザインや結果、結論に様々な問題点がある。さらに、福島県民の放射線被ばく量が、停留精巣を引き起こす原因となるということは、理論的には考えられない。しかし、実際の停留精巣の手術件数データを取りまとめた研究が過去に実施されていないことから、東日本大震災前後の福島県内全病院における停留精巣の手術件数の推移を実測値として明らかにする必要があると考えた。</p> <p>II 目的</p> <p>本研究の目的は、東日本大震災に伴う原発事故前後の福島県内の停留精巣の手術件数の実態調査を行うことにより、より正確な停留精巣の手術の年次推移を明らかにし、停留精巣患者数の年次推移を予測することである。本研究によって、原発事故に伴う健康影響（遺伝性影響）がないことを明らかにしたうえで、その正しい情報を国民や福島県民に発信することができる。また、得られた成果によっては、福島県の風評被害への対策の一助となり、本事業の目的である環境保健行政への貢献が期待できる。そして、福島県で働く一人の医療従事者として、福島県民が安心して、かつ安全に故郷に暮らすことができることを実現したい。</p>

III 研究方法

本研究は本学倫理委員会において承認済みである。

対象：2008年度～2020年度に行われた、病名が停留精巣で、停留精巣固定術（K836）、腹腔鏡下腹腔内停留精巣陰嚢内固定術（K836-2）の手術件数

【調査項目】

1. 概況調査

<方法>

福島県内の入院施設を有する93病院（医事課等病院事務）へのアンケート調査による概況調査
また、対照群として、県外（山梨県内）における43病院の実態調査を同様にを行う。

<調査内容>

- 1) 2008年度～2020年度における各年度の停留精巣の患者数
- 2) 1)のうち、停留精巣固定術（K836）、腹腔鏡下腹腔内停留精巣陰嚢内固定術（K836-2）を実施した対象患者数
- 3) 2)における手術実施診療科（泌尿器科、小児外科、外科、その他）
- 4) 2011年度以降、対象患者数の増加・減少の傾向および考えられるその理由

IV 研究結果、考察及び今後の研究方針

3月30日に全病院にアンケートを郵送し50施設の解答を得た。その後、アンケート郵送および電話連絡により回収を呼びかけ、最終的に現在病院を閉鎖した1病院を除いた87病院から返答を得た。そのうち、調査期間内に実際に停留精巣固定術、腹腔鏡下腹腔内停留精巣陰嚢内固定術を実施した病院は17施設であった。概況調査の結果、2011年から2012年にかけて、停留精巣の手術件数は実数値では増えていなかった。手術件数のみでは出生数の増減は明らかでなく、また遊走精巣を精巣固定術の手術適応とするなど、手術適応の方針の違いによる増減の影響が推察され、来年度以降の詳細調査が望まれた。また、対照群として、県外（山梨県内）における43病院の概況調査を同様にっており、アンケート調査が進行中である。

V 結論

原発事故後2011年から2012年にかけて、停留精巣の手術件数は実数値では増えていなかった。

引用文献

1. Murase K, Murase J, Machidori K, et al. Nationwide Increase in Cryptorchidism After the Fukushima Nuclear Accident. *Urology*. 2018 Aug;118:65-70.